

平成九年九月一〇日（水）

第二四四回 史跡めぐり 資料

バスで 香取 鹿島

越谷市郷土研究会

第244回 史跡めぐり 「バスで 香取 鹿島」

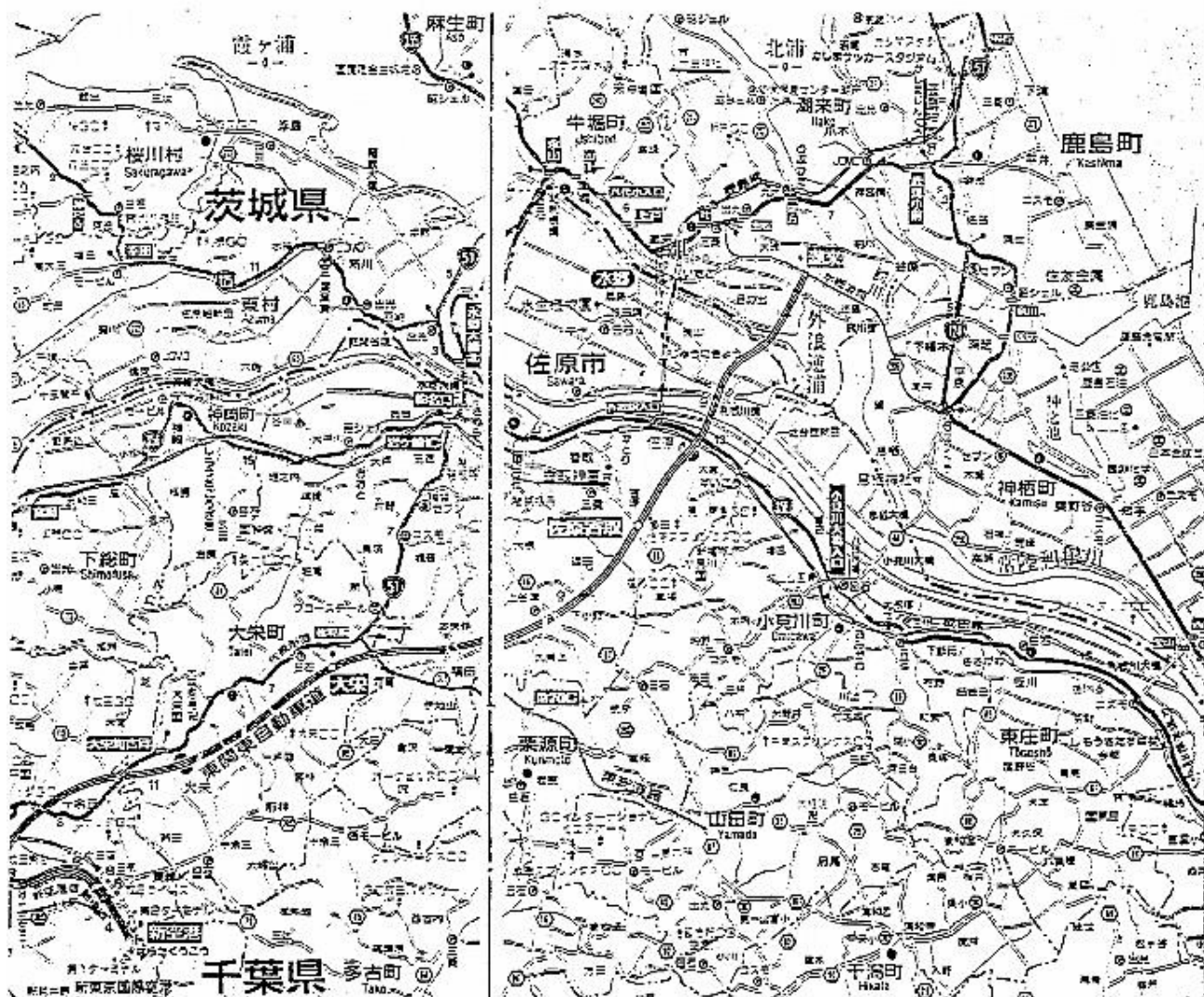
平成9年9月10日(水) 午前7時45分 南越谷駅前集合

8時 出発→首都高・湾岸線→南関東道→湾岸幕張P/A→
→佐原香取I/C→佐原市三菱館…伊能忠敬記念館…
水郷佐原山車会館→亀甲堂(昼食)…香取神宮→
→水郷大橋→大生神社→鹿島神宮→水郷有料道路→
→潮来I/C→南関東道→(途中休憩)→湾岸市川→
→首都高→南越谷駅前 19時頃

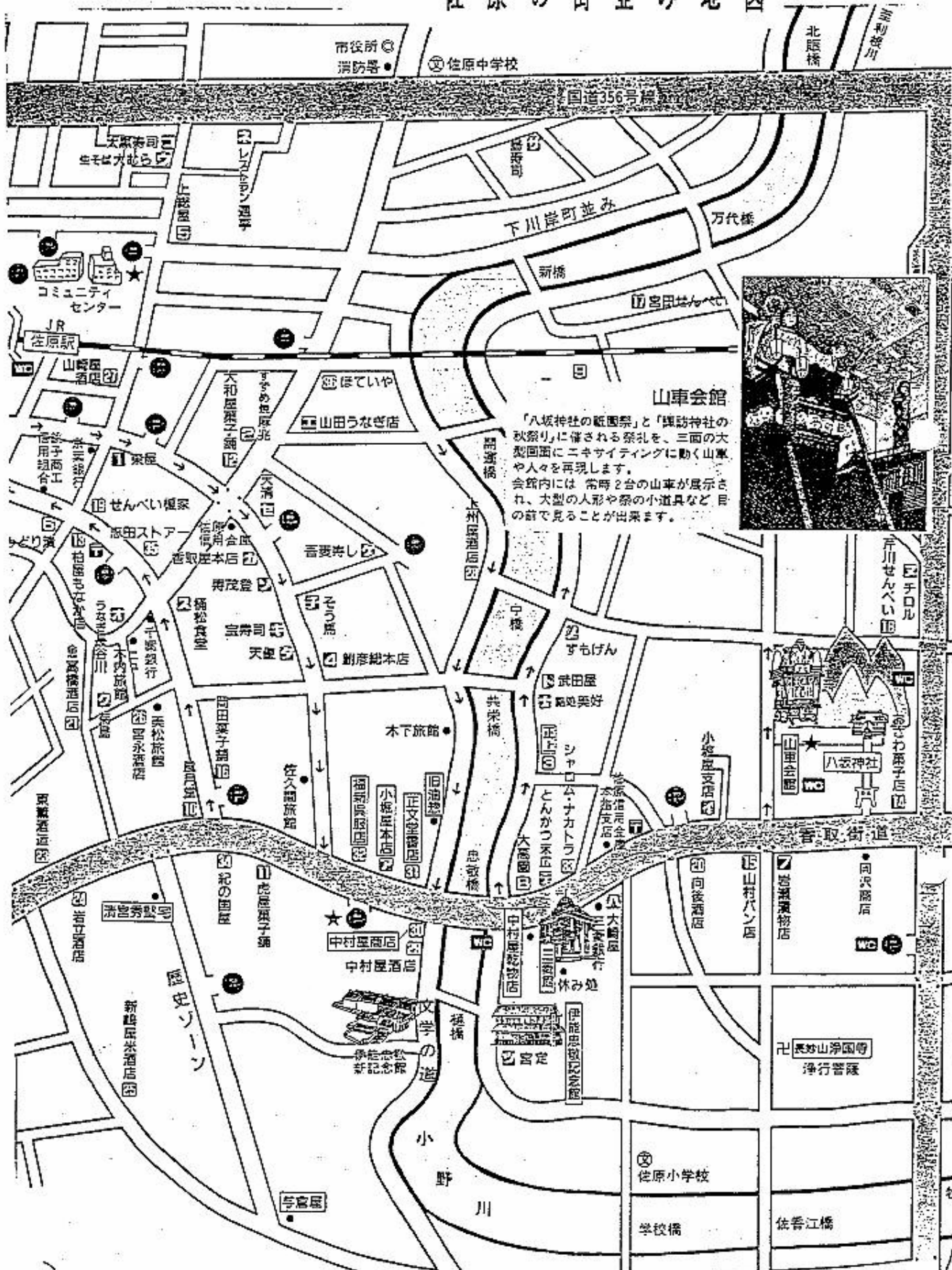
<当日の道路事情等で変更の可能性あり>

参加費 5,000円(水郷佐原山車会館・香取神宮宝物館・鹿島神宮宝物館 入場料を含む)

ご案内 理事・鈴木種雄 幹事・堤竹宏吉 幹事・宮川 進



佐原の街並み地図



山車会館
 「八坂神社の紙園祭」と「陣訪神社の秋祭り」に催される祭礼を、三面の大型回面にニキサイティングに動く山車や人々を再現します。会館内には 常時2台の山車が展示され、大型の人形や祭の小道具など、目の前で見る事が出来ます。



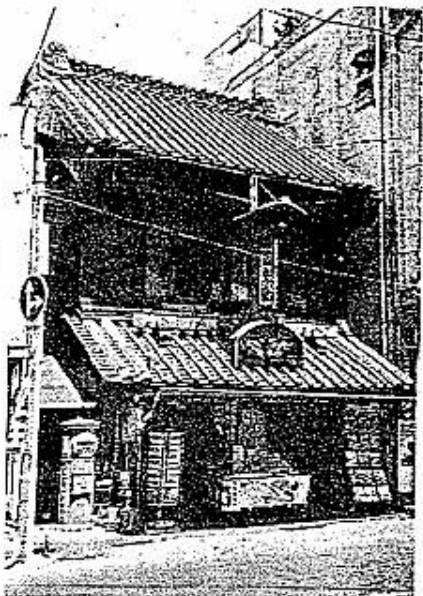
◎佐原の町並

^{ただなか}忠敬橋を中心とした小野川沿いが、江戸時代、利根川水運の発達によって栄えた商業の町佐原の中心であった。小野川は石の護岸で至る所に「出し」（船を着ける場所）が設けられ、柳がなびき風情があった。水量も豊かで、高瀬舟が往来し、佐原は近郷の物資の集散地として栄えた。

古い町並を訪ねてみよう。小野川左岸の忠敬橋のもとにある中村屋畳店は、正文堂書店 1855（安政2）年の建築である。そのむかい側にある正文堂書店（県有形）は、江戸時代の町家に用いられた、黒塗りの土蔵造の店蔵の形式をよく伝えている。間口3間、奥行3間5尺、木造切妻造瓦葺で、1880（明治13）年の建築である。正文堂書店の並びに、江戸時代天明期創業の小堀屋本店店舗（県有形）がある。1900（明治33）年の建築で、明治時代のそば屋の店舗建築である。小野川べりを下流に歩をすすめると、右岸に株式会社正上（いかに焼本舗）がある。2階建の店舗部分は1832（天保3）年の建築と伝えられている。

明治期のレンガ建築の様式を受け継いだ建物には、三菱銀行佐原支店がある。1914（大正3）年12月に川崎銀行佐原支店として建てられた。2階建、内部吹抜けで、屋根は木骨銅板葺、一部にドーム形式を取り入れ、明治の洋風レンガ造建築の様式を忠実に受け継いだ美しい建物である。

三菱銀行の手前、小野川寄りに、前出の正文堂書店と並んで、佐原の蔵造の町家の中では保存状態の良い中村屋乾物店がある。間口3間、2階建、瓦葺、切妻造の平入の蔵造で、1892（明治25）年の大火直後に再建された。このほかにも、小野川沿いや旧銚子街道沿いに古い家屋があり、河港商業都市佐原の面影を残している。



い の う た だ ち
伊能忠敬旧宅

▶ 佐原市佐原イ1899 (→ 図p.122,129)

▶ JR佐原駅バス香取神宮行橋元下車3分

佐原駅の東に、市街を二分するように流れる小野川がある。昔の香取街道にかかる忠敬橋（協橋）をわたり、すぐ右折してすすむと、小野川に沿って、古い商家造の平家の建物が見えてくる。ここが伊能忠敬旧宅（国史跡）である。裏に忠敬設計の母屋がある。

伊能忠敬は、1745（延享2）年、現在の山武郡九十九里町小関に生まれた。1762（宝暦12）年、18歳のとき、佐原の地主で、米穀商・醸造業を営んでいた伊能家の養子になり、50歳で長男景敬に家督を譲り、江戸に出て幕府天文方高橋至時に師事し、測量・暦学などを学んだ。その後、18年間をかけて全国を実測したが、地図未完成のうちに1818（文政元）年4月、江戸八丁堀の別宅で死去した。

その後、忠敬の友人で佐原津宮生まれの儒者久保木竹窓や忠敬の門

弟、幕府天文方によって「大日本沿海輿地図」「大日本沿海実測録」が完成し、忠敬の努力が結実した。

旧宅に隣接する伊能忠敬記念館には、二百余点の遺品（国重文）が保存されている。測量図や測量機械・日記・江戸時代の科学書などが展示されており、高い測量技術を知ることができる。



かとりじんぐう
香取神宮

▶佐原市香取1697 (←圖p.122)

▶JR佐原駅バス香取行終点下車1分

香取神宮は、下総国一の宮として古来から多くの尊信を集め、利根川を隔てた鹿島神宮（祭神武甕槌神）と並び称される東国の大社である。祭神は『日本書紀』の国譲り神話に登場する経津主神であり、軍神として崇められた。

総門をくぐり右折すると、左手に朱塗りの楼門（国重文）があり、その奥に本殿（国重文）がある。本殿は1700（元禄13）年に將軍綱

吉が造営したもので、壮大な流造である。楼門内右手には神楽殿があるが、本殿と同時代の建立といわれ、もとは拝殿であった。拝殿右の札所の隣に宝物館があり、中国初唐時代（7世紀）の白銅製の

海獣葡萄鏡（国宝）をはじめ、古瀬戸黄釉狛犬（国重文）、平安末期製作の銘が入った双竜鏡（国重文）や香取神社古神宝類（県有形）がある。そのほか1180（治承5）年の源頼朝の寄進状、1352（観応3）年の足利尊氏の寄進状などの貴重な古文書など、多数陳列されている。また、古文書として381通の香取大禰宜家文書（国重文）が、額賀氏宅に保存されている。

神域には、天真正伝香取神道流始祖飯孫長威斎墓（県文化）が旧参道の笠川屋旅館前にある。天真正伝香取神道流の型（県無形）は今も継承され、トンボ伝書と呼ばれる極意書が伝わっている。

旧参道は、江戸時代に利根川舟運の発達により、1678（延宝6）年以来木下河岸で香取・鹿島・息栖の3社参詣の乗客船（茶船）が営業されるようになると、津宮地区の鳥居河岸に船が着き、ここから香取神宮にむかうコースであった。鳥居河岸といわれるように、ここには一の鳥居や、また利根舟運の目印となる常夜灯があり、昔の名残をとどめている。

香取神宮の森（県天然）は、古来信仰の場として保護されてきたため、県内有数の巨杉が社殿を囲むように生い茂り、森厳な雰囲気をもっている。香取神宮の祭事は数多いが、おもなものは、御田植祭と神幸祭で、後者は軍神祭ともいい、12年に1度午年の4月14・15日に行なわれ、古式ゆかしい壮大華麗なものである。



香取神宮楼門

こま と おうきうこまいた

香取神社

千葉県佐原市香取

古代の霞ヶ浦は奥深い入海をなしていたが、その出口を両側から扼するよう香取・鹿島の両神宮があった。「延喜式」神名帳で「神宮」と書かれているのは、伊勢の「大神宮」を除けばこの両社のみであり、古代の官社のなかで特別の扱いをうけていたことがわかる。ともに「名神大。月次・新嘗」とある。

「日本書紀」には「天神（アマツカミ）が葦原中国（アシハラナカツクニ）を平定のため、経津主神（フツヌシ）と武甕槌神（タケミカヅチ）を遣わした。そして、経津主神（フツヌシ）と齋主（イワイヌシ）の神は今、東（アズマ）の國の齋取の地に在す」とある。

この齋取（いぢり）が香取神宮の「香取」である。香取の神は経津主神（フツヌシ）とも「齋主（イワイヌシ）」、「伊波比主命」などとも書かれている。

物部小事（モノノベノオゴト）を祖とする物部臣（モノノベノミ）の神「フツヌシ」は、大和の石上（イソノカミ）神宮の祭神であるから、同一國内の春日で藤原（中臣）氏がまつる氏の神を、同じにしたくなかったためだろう。

藤原（中臣）氏は、その権力で他氏の祭祀権を奪っていった。香取神宮の丑寅（東北）の方位に、鹿島神宮が位置する。鹿島神宮は畿内からみて「鬼門降伏」のために鎮座しているという。香取、鹿島の位置関係も意図的なものと推測できる。鹿島と香取のペアは、祀られる神と祀る齋主との関係である。

香取神宮の丑寅（東北）の方位に、鹿島神宮が位置する。鹿島神宮は畿内からみて「鬼門降伏」のために鎮座しているという。香取、鹿島の位置関係も意図的なものと推測できる。鹿島と香取のペアは、祀られる神と祀る齋主との関係である。

宮井義雄は「齋主は原始には女性の任であった。イハヒヌシの命の名前は本来からすれば女神でなければならぬ」として海部（海夫）の祭る女神とする。

天皇家での伊勢神宮の外宮の祭神は「豊受（トヨウケ）大神」であるが、「ウケ」は食物の意味で、その神は女神であり、御饗供奉の神女の意味もある。香取神宮には「姫」（アサメ）という女祭司がいた。そして、鹿島神宮より物忌（齋主）が一人多いとあるが、これがアサメではないだろうか。アサメとは御膳供奉の女官である。これが、香取神宮の外宮的性格である。

わが国の神祇政策を掌握した藤原（中臣）氏は、そのシンボルとして、皇室の氏神・伊勢内宮・外宮と、それに対応するものとして藤原（中臣）氏の氏神・香取・鹿島を整備していったと考えられる。

最初の「日本書紀」の文章も一番古いものは「フツヌシ」だけしか書かれていなかったと思われる。「タケミカツチ」を加え、それだけに変えようとしたのは、この神話を藤原氏のものにしたかったためである。

香取・鹿島がはっきり藤原氏の氏神といえるようになったのは、760年代に大和国の春日の地へ両神を移してからである。しかし、物部氏や齋部氏は9世紀後半から10世紀になっても、香取の神を藤原氏用のタケミカツチの神の齋主とすることを認めていない。

ところで、香取は「齋取」とも書かれるように、船の「掬取」（かじとり）のことである。香取神宮は、中世、常陸・下総両国の浦々の海夫から「海夫注文」と称して供祭料を徴収していた。香取神宮は本来、内海沿岸の海夫たちの祭っていた神社であろう。それに対し、鹿島神宮は外海へ出て蝦夷地へ向かうための港であったから、内海住民たちの日常の生活と直接関係ない。

「かとりまち」とは風水害もなく無事に田植えを終え、秋の収穫を待つことをいう。その「かとりまち」の祭りが、現在4月4日に行われる大祭「御田植祭」である。「秋のかとりまち」は11月23日の新嘗祭である。

海部は尾張連（オワリノムラジ）であり、始禰ニギハヤヒノミコトは物部氏と同一である。物部氏は海部（尾張連）と組んで、東国へ進出したのである。そして、多氏も物部氏・尾張氏と混ざりあっている。

大和岩雄「香取神宮」より（谷川健一編「日本の神々」第11巻・関東

84・12 白水社刊）

香取の神と古代下総地方

―産鉄の足跡をめぐって― 柴田弘武
歴史手帖8巻5号 名著出版S55・5刊

鹿島・香取地方は交通の要衝であったばかりではなく、砂鉄の産地でもあった。福士幸次郎は鹿島・香取について前者はカガシマ（金のある島）、後者はカガトリ（金を採る処）であろうと推測している。下総地方は砂鉄の豊庫であり、たたら遺跡も多く、おそらく多くの古墳とそれらの産鉄地とは密接な関係があったと思われる。そしてその古墳の被葬者こそ、鹿島・香取の祭神がきまる以前にこの地方に侵入してきた産鉄族ではなかったろうか。

「常陸國風土記」に登場する人物は建借間命（タテカシマノミコト）など、その多くはオオ氏（多、飯富、太など）と書く。太安万侶も「結びついていゝる。このオオ氏の本貫を大和の十市郡とする説があるが、私はオオ一族に、火君、阿蘇君、大分君、筑紫三家連などがあることや、装飾古墳・製鉄技術などの関連から、オオ氏の本貫は北九州にあると考えている。この九州オオ氏は、早く5世紀頃から太平洋の黒潮に乗り、常陸地方に海路侵入した形跡がある。それはオオ氏が産鉄族で、鉄産地を求めてのルートであったようだ。オオ氏が産鉄族であったことは、その出自の伝承に反映している。オオ氏は神八井耳命（カムヤイミノミコト）の裔とされている。父は神武天皇、母は富登多多良伊須須岐比売（ホトタタライススキヒメ）、兄弟は日子八井命（ヒコヤイノミコト）、神沼河耳命（カムヌナカワミノミコト）。

下総における多氏の一族、長狭（ナガサ）国造、印波国造。馬来田国造の地に式内社・飯富（オオ）神社がある。我孫子市あたりは於賦（オフ）郷とよばれていた。船橋市の意富比（オオヒ）神社もオオ氏の遺称地であろう。かつての下総國の水海道市にも大生郷があった。

鹿島神宮がもともとオオ氏の氏神大生神社から移され、中臣氏に祭祀権をのっとられた経過のようなものが、香取神宮にもあったのではないか。

茨城県内の古墳・横穴の壁面が占める古代史上の意義

県内の古墳・横穴の壁画は、この種のものの全国的な水準においても、特異な

地位をもっている。このことは、その数量においてもはもとより、図文やその内容の特殊性においてもいえるのである。北九州にいちじるしい発達を示したその種のもものが、他の地域をさしおいて何故、古代常陸國のみに異彩を放ったのであるのか、それには、いろいろな考え方がみちびかれるかも知れない。ただ、その一つの考えとして常陸國において筑前・肥後・肥前等の北九州の地域とも関係をもつ多氏すなわち意字氏という有力な氏族が存在したという問題も無視することはできないであろう。

茨城県史 原始古代編

S60・3 茨城県刊

鹿島神宮

▶鹿島郡鹿島町宮中〈一廻p.168〉

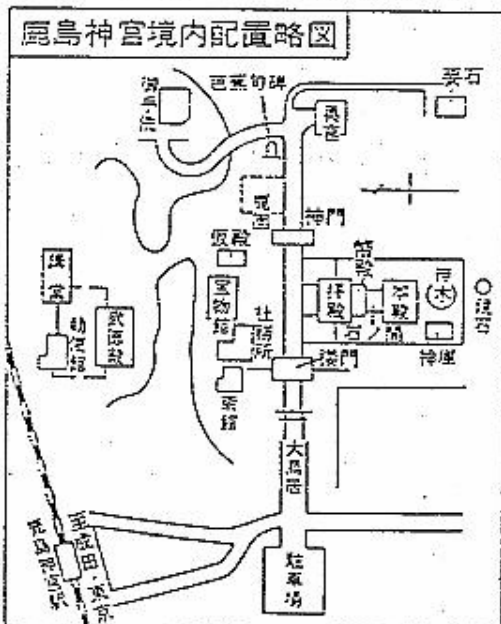
▶鹿島線鹿島神宮駅下車8分

鹿島神宮は、常陸国一の宮として古来から多くの尊僧を集めた東国の大社である。ケヤキ並木の参道をすすんで大鳥居をくぐると、正面に徳川頼房の寄進した朱塗りの雄大な楼門（国重文）があり、それをぬけると、右手に二代將軍徳川秀忠の奉納した五間三面入母屋造の拝殿・三間社流造の本殿（国重文）がある。拝殿の前には宝物館があり、県内唯一の国宝長さ2.7メートルの直刀をはじめ、源頼朝が奉納した鞍、「申田宅印」の文字がある銅印など、貴重な宝物が数多く陳列されている。

本殿前の参道をさらにすすむと、スギ・シイ並木の奥参道の終点に、祭神武甕槌神の荒御魂をまつる奥宮（国重文）がある。徳川家康が関ヶ原合戦の戦勝を記念して、奉納した雄大な流造の社殿である。奥宮から道は左右に分かれ、この分岐点に松尾芭蕉の「この松の 実生えせし代や 神の秋」の句碑がある。右手の道をたどると「罌石」にでる。直径20センチほどの丸石で、地震を起こす鯨の頭をおさえているとの伝説があり、最初の社殿が営まれた跡ともいわれる。

奥宮から左手の坂をくだると御宇洗池があり、山中から湧きでる清水はこの池に流れこむ。むかしから神職深斎の池として名高い。鹿島神宮の境内は約63ヘクタールあり、南限・北限の植物が同一地帯にみられ、境内全域が県の天然記念物として保

護されている。またこの神宮の大祭、春の祭頭祭は防人にまつわる奇祭として、秋の神幸祭はちょうちん祭りとして有名である。



鹿島神宮

茨城県鹿島郡鹿島町宮中

「常陸国風土記」(養老5年：721年頃 常陸国司であった藤原宇合によつて編集されたか)は鹿島神宮について「天の大神の社、坂戸の社、沼尾の社、三処を合せて、すべて香島の天の大神といふ」と書いている。

「香島の天の大神」とは、蝦夷地に対する境の神である。異境の荒らぶる神を防ぐ、大和政權の塞の神、道祖神であった。

「カシマ」は港を意味し、そのことは、「鹿島立ち」(長旅に出立する際、無事を祈つて鹿島神の加護を求める習俗)という言葉にもかかっている。

鹿島神宮の祭で最も盛大な「祭頭祭」は、「歌い舞う」行事：荒ぶる所作。

「常陸帯」神事とは神前で禰宜が男女の名を記した帯の先を結び合わせて、結婚の相手を占つた習俗である。

鹿島神宮の正殿を「不開殿(あかずどの)」という。この戸を正月七日に開く神事を「御戸開神事」という。不開殿に入るのは物忌(斎宮)だけ。

物忌は神妻である。この神事は、わが国固有の正月神事である。冬至の後、新生した大神と神妻の聖婚儀礼である。そして、鹿島の「境界信仰」にも連なるものと思われる。神が海(死の国)からよみがえって現れね境界を開く神事である。

「甕」とも関係がある。甕を境界におくのは、「外からの邪靈、災禍をして地塚の内に入れまい」という布求に基づく『阻止の祭儀』である。：松村武雄。

境の神は蛇神でもある。常陸帯とは、神功皇后の懐胎の時の腹帯と伝えられているが、苧(カラムシ)を帯状に幾重にも輪に巻き上げたものである。

これは「蛇」を象徴するものではないか。また、蛇にも関わるのである。

神功皇后が出産をおさえるために「石」を「御装の腰にまかし」たことは、

石が「生（荒）れ」をおさえること。鹿島の七不思議の第一の「要石」は「地震」という地の「荒れ」を鎮めるに発展したものである。

鹿島神宮の祭神がタケミカヅチとなるのは、9世紀以降である。それまでは、「香島の天の大神」と「常陸国風土記」に記すだけである。

正殿は北面している。ご神体は東に向いている。鹿島の神は、朝日の昇るはるか太平洋に向いているのである。

大和岩雄「鹿島神宮」より（谷川健一編「日本の神々」第11巻・関東
84・12 白水社刊）

春日明神

上田正昭編
筑摩書房刊 87・12

なぜ、藤原氏は鹿島・香取を氏神として奉斎するようになったのか。

常陸守兼按察使であった藤原宇合（ウマカイ）が鹿島・香取両神の信仰にふれ、「征夷」のうちにこの両神の「分霊」を奉持した状況があること、そして、宇合の第二子藤原良継が官社化を推進して永手（藤原房前の第二子）の協力のもとに、春日祭神四座を官社にしたとみなす説があるが、説得力に富む見解である。

中臣氏の「私氏神」である枚岡社の「天児屋根命・アメノコヤネノミコト」と比売神・ヒメカミ」のほかに、藤原氏が、あらたな「氏神」として官神化・国家神化しつつあった鹿島神を、「記紀」神話に活躍する武甕槌命（タケミカヅチノミコト）として、「私氏神」よりも上位に置き、あわせて鹿島神にたいする香取の斎主神（司祭神）を併記したのではなかったか。

東海の鎮守―鹿島・香取神宮―

神社の古代史（朝日カルチャーブックス）
岡田精史著 大阪書籍 85・10刊

鹿島神宮

古い時代の社殿は参道の突き当たりではない。香取神宮も古い参道は同じ。
ご本殿の真裏にご神木があり、またその真裏に鏡石がある。

鹿島神宮と香取神宮は二つでセットになった神社と考えてよい。

*鹿島香取使という勅使が派遣される（毎年）地方の神社はここだけ。宇
佐八幡宮は足掛け7年目ごと。

*神階をセットになってもらっている。

律令国家でどのような扱いをうけてきたか。

*勅使がある。

*「神宮」というのは伊勢神宮とこの二つだけ。石上（イソノカミ）神宮
は紀紀では神宮だが、延喜式では「布都御魂（フツノミタマ）神社」と
格下げ。宮には宇佐八幡宮と宮崎宮がある。

*特別な領地として神部をもっている。伊勢神宮。宗像大社。出雲大社。

日前神宮・国懸（クニカガス）神宮（紀伊國）。安房神社。
いずれも交通に重要なところにある。

タケミカツチの性格

*古いご神体は磐座（イワクラ）。ご社殿が出来てからは刀剣が御霊代
（ミタマシロ）。石上（イソノカミ）神宮には、タケミカツチが天上から
投げおろした刀が祭られている。

タケミカツチは、もとは物部氏が奉じていた神ではないか。物部氏が没

落したあと、中臣氏が祭るようになったのではないか。

物部氏が蘇我氏に敗れて没落。藤原鎌足が、常陸に封戸（フコ）を設けた。藤原鎌足は常陸で生まれた。信頼できる話ではない。

藤原氏が中臣氏から独立すると新しい神社をつくる必要ができた。そこで、中臣氏の氏神の東大阪市にある枚岡神社の神二座（天兒屋根命・アミノコヤネノミコトと比売神・ヒメカミ）と鎌足の封戸にゆかりのある土地の鹿島のタケミカツチ、香取のイハヒヌシを合祀したのが春日大社だと思う。

香取神宮

フツヌシが香取神宮の祭神だと書きはじめたのは、平安時代の斎部広成（インベノヒロナリ）が纏纂した「古語拾遺」。しかし、その後、南北朝の「神皇正統記」までではとりいれられなかった。

フツヌシとは石上（イソノカミ）神宮の祭神フツノミタマの別名ではないかといわれている。

イハヒヌシとは「斎主：お祭りを執行する責任者」である。

香取は、もとはちゃんとした地主神としての神名があったのだから鹿島の神の「斎主」役の神として残った。

中臣氏

なかとみうじ

日本古代の豪族。大和朝廷では祭祀を担当し、姓（カバネ）は連（ムラジ）。大化改新後に藤原氏を分出。八色（ヤクサ）の姓の制度で朝臣（アソン）と賜姓。天皇側近の神官として神託を伝えるという職掌による呼び名である。祖神は天兒屋命（アメノコヤネノミコト）。遠祖としては大鹿島、鳥賊津がいる。（オオカシマ。イカツ） 嫡流が途中で絶え、常陸の鹿島からきた中臣（遠祖は大鹿島）が跡を継いだとの説もある。

御食子（ミケノコ）の子の鎌足（のちの鎌足）が生まれたころの中臣氏は多くの支流にわかれ、各地に中臣部という私兵や田荘をもつ、かなり有力な朝廷豪族であった。しかし、鎌子は神官の職をつがず、大化改新以後は内臣として天智天皇を輔佐し、669年に病没した時は大織冠・内大臣という冠位・官職と藤原の氏を賜った。以後、一族は中臣藤原連（ナカトミノフジワラノムラジ）、すなわち、朝廷の官人としては藤原、神官としては従来どおり中臣と称するようになった。

壬申の乱（672）で鎌足の従兄弟の右大臣・中臣金（クガネ）は切られ、鎌足の子の不比等（フヒト）もしばらくは逼塞していたが天武天皇夫人となっていた鎌足の娘の氷上・五百重（ヒカミ・イオエ）がそれぞれ皇女・皇子を生み、やがて不比等や金の甥の大嶋も活躍しはじめた。八色の姓の制では中臣連のうちの藤原系が物部連とともに例外的に臣と賜姓された。

文武朝に入ると娘の宮子を文武天皇夫人とした不比等は藤原朝臣という氏姓を自分の子孫に限定するために、朝廷の祭祀は再従兄弟の意美麻呂（オミマロ）らが担当するという理由で彼等を朝臣とし、藤原と中臣の分離に成功した。奈良時代の中臣氏からは意美麻呂の子で正二位右大臣にまで進んだ清麻呂が有名。769年には大中臣の氏を賜った。

おおうじんじゃ 大生神社 行方郡潮来町大生にある。旧舞社。祭神は健甕雷之男神。768年(神護景雲2)、春日(現・奈良県奈良市)に遷宮したものを、806年(大同1)、現在地に迎えまつたと伝えられる。鎌倉幕府以来、武家の保護を受けたという。1589年(天正17)、火災に遭い、翌年再建されたものが現社殿である。朱印地39石。例祭は11月15日。鹿島神宮からも奉納物や費用負担があったようである。この祭りには県指定無形文化財の巫子舞神事が古くから行われている。境内社2社。本殿は県の文化財に、神社境内の樹叢は県の天然記念物に指定されている。

〈中村 宏〉

〔本殿〕 1957年(昭和32)県指定文化財。三間社流れ造りの形式をもち、行方郡一帯では規模の大きな社殿である。正面3間、側面2間で正面中央間に尚開き板戸を立てている。また、正面には浜床を設け、中央に宝珠柱の登り高欄を付けた木階がある。数回の改築を経ており、向拝および正面の齋殿・木鼻などの様式手法や、全体の構造工法などは江戸時代中期のものであるが、桃山時代の古材も再用されている。規模が大きく堂々とした社殿で、細部意匠に地方色がみられ、この地方の文化史を知るうえで貴重な資料である。

〈一色史彦〉

〔大生神社巫子舞神事〕 1963年(昭和38)県指定無形民俗文化財。江戸時代、大生神社には鹿島神宮から物忌みがきて祭りをを行い、巫女舞が奉納されていた。それが現在に伝わり、11月15日の例祭が巫女舞神事となっている。祭りは11月1日夜の巫女遊びから始まる。巫女は大生の34戸の氏子の中から、両親が健在でその年に不幸のなかった7～12歳までの長女の中から1人が選ばれる。巫女が決まると、その夜のうちに祭事係が額屋(巫女の

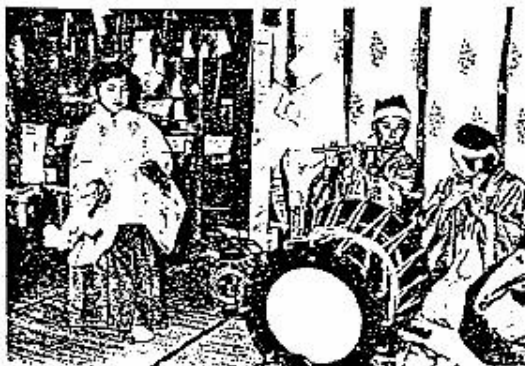
〔大生神社の樹叢〕 1964年(昭和39)県指定天然記念物。

大生神社境内に繁茂し、神社の長い歴史とともに生育してきた常緑照葉樹を中心とした樹叢である。面積280haで、周辺は耕作地と、アカマツ林やスギ・ヒノキの植栽林からなっている。樹叢の高木層はスダジイ・タブノキ・シラカシ・スギ・ヤマザクラなど、低木層はヒサカキ・ア



オキ・ゴンズイ・ガマズミ・アケビなど、草木層はヤブコウジ・ベニシダ・キンラン・ジャンヒゲ・シダ類などからなっている。とくに、本県を分布の北限とする暖地性の常緑高木のカゴノキが生育しており、目通り幹周囲約3.2mの大木である。クロマツは最大のもので樹高30m、目通り幹周囲約4mのものがある。目通り幹周囲は、スギ2～5.3m、シイ2～4.2m、タブノキ2.5m、ケヤキ2～3.1m、イチョウ4.1m、クスノキ4m以上といずれも大木ばかりである。昔より、大生の森とも呼ばれ、鹿島選航路の目印の役割を果たしていた。「大生の宮 ひるなお暗し ほととぎす」とも詠まれている。

〈山崎政男〉



大生神社〔大生神社巫子舞神事〕

大生神社

行方郡潮来町大生

鹿島神宮の西北西、北浦をはさんだ行方台地の一角に、大きな古墳群に囲まれるように鎮座し、「元鹿島の宮」ともいう。祭神はタケミカツチの神。「元鹿島の宮」といわれるのは、鹿島神宮の祭神が当社から移ったという伝承による。

「大生宮↓春日社↓大生宮↓鹿島社」と祭神は移り、現在は鹿島神宮の「別宮」と称すという。

その前身は、大和国十市郡飯富（オホ）郷（現在の桜井市多）の多神社である。もとは多氏の祭祀する神社であった。この地は多氏に関係が深い。

那賀国造（ナカノクニノミヤコ）多氏と同祖の初祖・建借間命（タケカシマノミコト）の話が「常陸国風土記」行方郡板来Ⅱ今の潮来の条に載っている。

藤原鎌足の頃はまだ、鹿島・香取は藤原・中臣氏の氏神ではなく、太平洋岸から船で蝦夷地へ進出する物部・多氏らが祭った「境（海坂）の神」を中央政府が利用したにすぎないと考えられる。その鹿島神宮の祭祀権を中臣鹿島連が握り、藤原・中臣氏の氏神としたのは天平年間以降のことであろう。

中臣鹿島連の前身の中臣部・卜部は鹿島神宮の祭祀民族に従って卜占を行っていた人々であろう。

大生神社が鹿島神宮にとって特別視されていた例としては素宮が境内から出でる唯一の神社であることがあげられる。

大生西古墳群は6世紀後半から7世紀後半にかけて築造されたものといわれる。（神郡設置は649年）

大和岩雄「大生神社」より（谷川健一編「日本の神々」第11巻・関東

84・12 白水社刊）

藤原氏 ふじわらうじ

日本の代表的な貴族。大化改新後の天智朝に中臣氏から出て、奈良時代には朝廷で最も有力な氏となり、平安時代に入るとそのなかの北家が摂政や関白を独占し歴代天皇の外戚となつて、平安時代の中期は藤原時代とも呼ばれるほどに繁栄した。鎌倉時代からはそれが近衛家、二条家、一条家、九条家、鷹司家の五摂家に分かれたが、以後も近代初頭に至るまで、数多くの支流を含む一族全体が朝廷では圧倒的な地位を維持し続けた。

【初期】藤原とは今日の奈良県橿原市高殿町あたりの地名であるが、中臣氏の遠祖鳥賊津が仕えた允恭天皇妃の宮があつたとの伝承があり、大化改新の功臣中臣鎌足が生まれたのもこの地であつた関係で、鎌足は六六九年(天智八)病死する前日に、藤原という氏を賜つた。しかし当時の藤原氏はまだ中臣氏の一部で、正式には中臣藤原連と称したと思われ、六八四年(天武十三)の八色の姓で、その姓が連から朝臣に上ると、鎌足の従兄弟の子たちまで藤原朝臣と称した。そこで鎌足の子不比等は、父に賜つた名誉を自分の一家に限定しようと、六九八年(文武二)、再従兄弟たちをみな中臣朝臣と称させることに成功した。この成功の陰には、娘の宮子が文武天皇夫人となつていたという事情があるが、後宮に娘を送り込んで天皇を動かすという手段は、不比等自身が七〇一年(大宝元)の律令制定に

参加し、七〇八年(養老二)には律令改定に着手するなど、新しい政治に積極的に関わり組む姿勢を維持した。ととともに、その後の藤原氏が絶えず政権の主流を占める際の常套的な手法となつた。

【奈良時代】文武天皇が宮子の生んだ首皇子(のちの聖武天皇)を残して早逝すると、不比等は後妻の具犬養三千代の生んだ光明子を首の妃として皇帝との姻戚関係を維持しながら、武智麻呂、房前、宇合、麻呂の四子を次々と朝廷に送り込み、七一七年(養老元)に右大臣で朝廷の首班となると房前を参議に加え、大臣以下参議以上の公卿には有力諸氏から一人ずつという慣例を破り、七二〇年に不比等が没した後は、武智麻呂が中納言となつて公卿に加わつた。だが首班は左大臣長屋王となり、王は即位した聖武天皇の皇后に光明子が夫人から昇格することに反対したので、七二九年(天平元)武智麻呂ら四兄弟は長屋王を反乱の罪名で自殺させ(長屋王の変)、光明子を臣下の出身としては最初の皇后とした。しかし七三七年には疫病のために四兄弟がみな病死して具犬養三千代の前夫の子の橘諸兄が朝廷の首班となり、また七四〇年に宇合の子の広嗣が北九州で反乱を起したので(藤原広嗣の乱)、藤原一族はしばらく逼塞した。

やがて聖武と光明との間に生まれてきた孝謙女帝が即位すると、武智麻呂の子で女帝の従兄にあたる仲麻呂が勢力を伸ばし、七五七年(天平宝字元)には祖父不

比等の手がけた養老律令を施行、また諸兄の子の奈良麻呂ら政敵を倒して淳仁天皇を立て、独裁的な権力を振るったが、孝謙前女帝が道鏡と親しくなると、七六四年、反乱を起して自滅した(惠美押勝の乱)。道鏡の時代にも行政の実務は藤原一族が握っていたが、七〇年(宝亀元)に女帝が没すると、房前の子の永手や宇合の子の良継・百川らは天智の孫にあたる老齢の光仁天皇を擁立して道鏡を追放し、それぞれ朝廷の要職を占めるに至った。

〔平安時代〕 光仁天皇に続いて立った壮年の桓武天皇は、七八四年(延暦三)に長岡京、七九四年には平安京への遷都を断行し、前代以来の蝦夷征討も推進するなどの積極的な政策をとり、久しぶりに天皇主導の時代となったが、その後宮にはやはり藤原氏から皇后として良継の娘の乙平瀨(平城・嵯峨の母)、夫人として百川の娘の旅子(淳和の母)らが送り込まれていた。

藤原氏はこのころになるとかつての不比等とその四子の時代のようなまとまりはなく、いわゆる南家(武智麻呂)、北家(房前)、式家(宇合)、京家(麻呂)の四家に分かれ、それぞれ榮達を競っていた。このうちで南家は仲麻呂が出たために打撃を受け、式家は乙牟漏や旅子の従兄弟にあたる種継が桓武天皇に信頼されて長岡京造営を指揮している最中に暗殺され、また種継の子の薬子・仲成兄妹は薬子の妾を起し、京

家では麻呂の子の浜成が桓武即位の当初に大宰府へ遣放されたあと活躍する人材がなく、光仁朝の永手以後は自立たなかった北家から内麻呂が出て平城朝に右大臣となり、続く冬嗣、良房、基経の三代で他家を完全に圧倒するに至った。

すなわち、まず冬嗣は嵯峨天皇の信任を得て蔵人頭から左大臣にまで昇り、良房は清和天皇が幼少で即位すると臣下で最初の摂政となり、基経に至っては陽成天皇を廃し光孝天皇を立てて関白となるのである。その後は醍醐・村上兩天皇の時代を除いて、ほとんどつねに摂政か関白かが基経の子孫から任命され、道長・頼通の二代には摂関家が榮華をきわめ、後世、藤原時代とも呼ばれるような摂関政治の時代になる。しかし頼通に天皇となるべき外孫が誕生しないままに、摂関家を外戚としない後三条天皇が即位すると、摂関の権威はにわかには没落しはじめて、やがて院政の時代を迎えることとなる。その後、鎌倉時代以降摂関家は五摂家に分かれ、またそのほか、閑院家(三条家、西園寺家、徳大寺家)、花山院家(中山家、大炊御門家、難波家、飛鳥井家)、御子左家(冷泉家など)、四條家(山科家など)、勧修寺家(葉室家、甘露寺家、坊城家など)、日野家(広橋家、柳原家、鳥丸家)、中御門家(松木家など)などの傍系も生じた。

子方前塚古墳 四石谷原川の支谷に大膳池があり、その支谷に而して大生古墳群が形成されて...

報告によると、北西に面する前方後円墳で、その規模は全長七一・五メートル、後円部直径三...

その北側に円墳が二基ほどあって、天神塚古墳がある。一九七九年「昭和51、東京電機大学高...

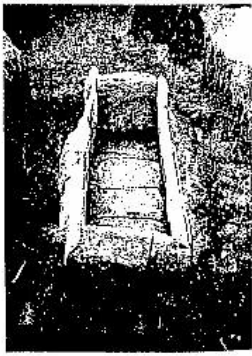
できない。 墳丘からは埴輪も多く発見され、円筒、人物、馬、鞍形埴輪などがふくまれている。



68. 子方前塚古墳 現在口前方部のみがのこされている



70. 子方前塚古墳の埴輪

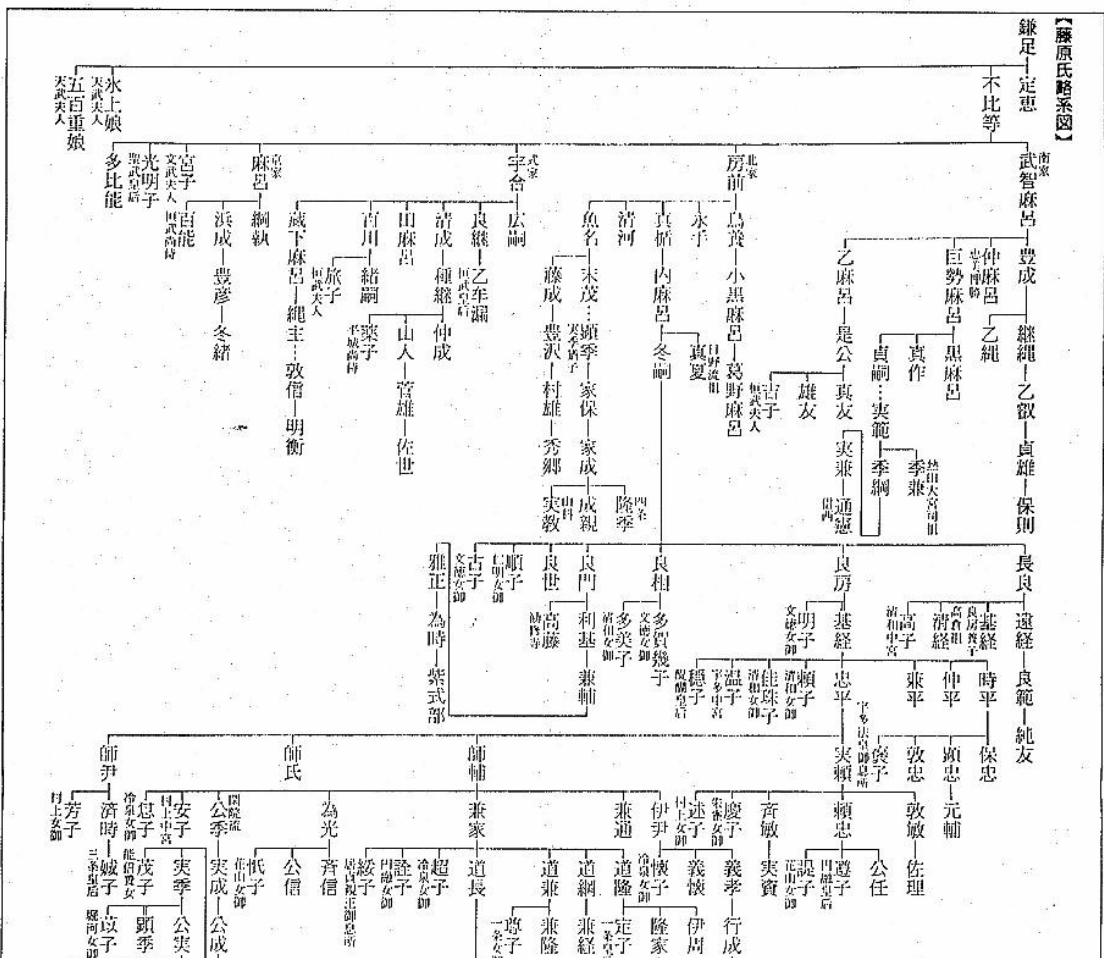


69. 子方前塚古墳の石棺

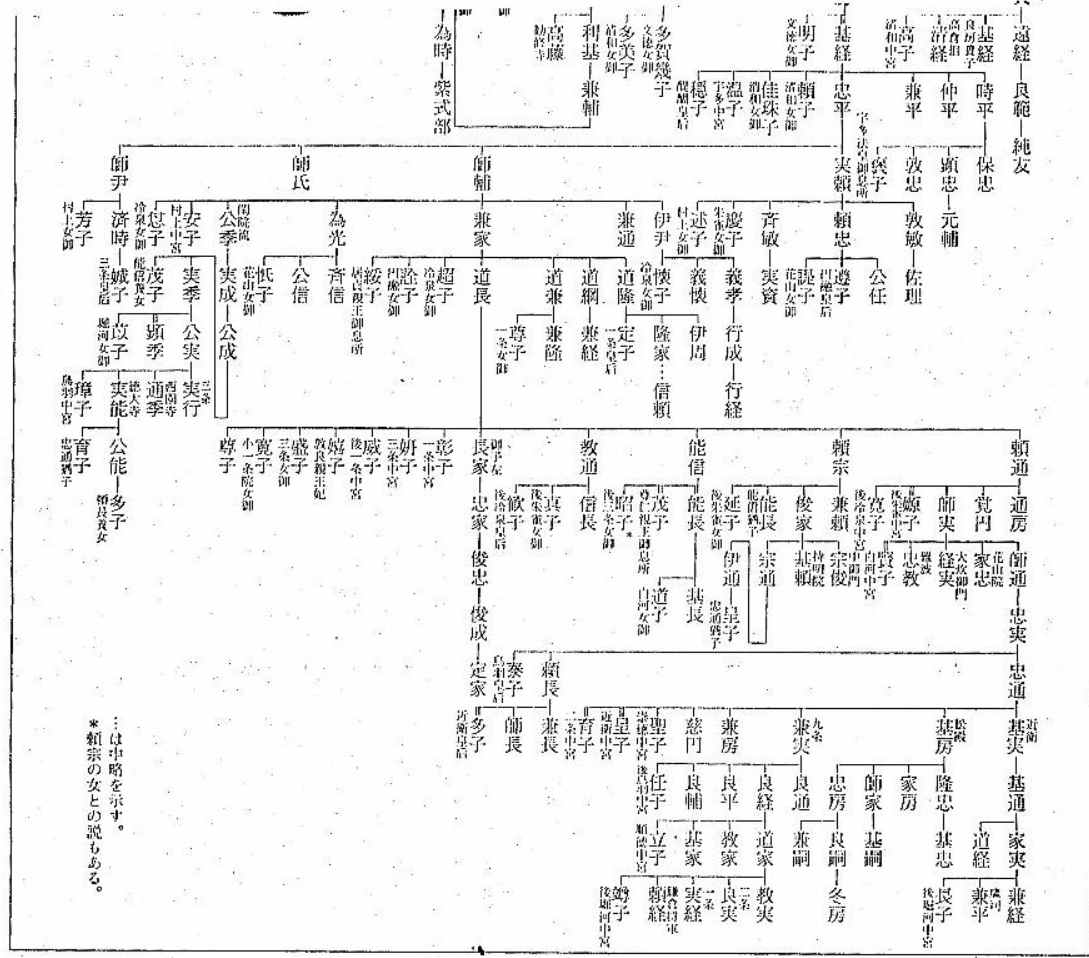
茨城県の古代遺跡36 茨城 茂木雅博編 保育社 S62・9刊

他に参考としたもの 千葉県歴史散歩 千葉県高等学校教育研究会歴史部会 山川出版社 茨城県の歴史散歩 茨城県歴史散歩研究会 山川出版社

ふじわらうじ



【藤原氏系図】



：は中略を示す。
 *頼宗の女との説もある。